

項目	取組状況
教育	<p>◆ 平成 30 年度（2018 年度）担当科目</p> <p>本科 3 年・国語（大阪府大高専） 本科 3 年・特別研究前期（大阪府大高専） 本科 4 年・言語と文化（大阪府大高専） 専攻科 2 年・日本文学（大阪府大高専） 学術基礎（京都造形芸術大学・通信教育部） 文芸創作演習 1（京都造形芸術大学・通信教育部）</p> <p>◆ 担当科目の取組状況（工夫・改善した点）</p> <p>①平成 29 年度（2017 年度）までは、大阪府大高専本科 3 年・「国語」の授業において、能動的な日本語表現力（書く力、話す力）の洗練・強化に重点をおき、授業時間の配分においても、これらの活動にかなりの時間を割く授業展開を行ってきた（小論文課題およびスピーチ課題）。しかし、基礎的な語彙力を滋養しないまま、これらの活動を続けていく限界を感じていたため、平成 30 年度（2018 年度）より 3 年国語をすべて担当することを奇貨として、まず、教科書を選びなおした。具体的には、従来使用してきた『はじめての評論文 20 選』（明治書院、2011）から『読解 評論文キーワード 頻出 225 度&読解演習 50 題』（筑摩書房、2013）へと変更した。変更の際には、多くの類書を取り寄せ検討し、現代文の頻出語彙や評論文の選択の質がもっとも高いと思われるものを選んだ。3 年国語の教科書変更に伴い、国語では、毎回の授業で用いる小テストならびに評論文読解プリント 30 回分をすべて作り直し、授業に使用した。そして、3 年国語では、日本語運用能力が高い受講者にも低い受講者にも意義ある授業はどのように可能か、を常に考えつつ授業運営した。学生には、論理の「構造」をよく考えるよう強調し、「抽象」（まとめると）「具体」（たとえば）「類似」（似ている）「差異」（違う）の 4 つのキーワードを強調しつつ授業した。ひとつのまとまった文章やプレゼンテーションの中で、対象がどのように抽象化されているか、あるいは具体化されているか、抽象をさきに述べているか、いきなり具体からはじまるのか、それによる効果はどう違うか、などの問いかけを授業では頻繁に繰り返した。また、同様に、ひとつのまとまった文章やプレゼンテーションの中で、対象がどのように類似するものと差異化して語られているか、あるいは独立したふたつ以上のものがどのような類似によって結びつけられているかも、繰り返し受講者に問うた。加えて、あるひとつの文章と類似した点がある文章を「重ね読み」（国語教育学者・大村はまの用語）して差異を考えさせる実践や、ひとつの文章で示された内容に似た具体例（類似）を独自に考えさせることで思考力を鍛えようとする実践も頻繁に行った。授業をやりっぱなしにするだけではなく、こうした国語の理論的背景と実践の一端を、後述の研究業績①の報告において論文化した。</p> <p>②大阪府大高専本科 3 年、「特別研究前期」においては、2018 年度は「100 年後に残したいもの」を学年共通の大枠として設定し、筆者をふくむ 4 名の教員でこれを担当した。研究入門の授業として、問題のを見つけ方に関する相談に頻繁に応じたほか、報告書やプレゼンには多くのコメ</p>

ントを与え、フィードバックした。

③大阪府大高専本科 4 年・「言語と文化」においては国内外の短編小説を「技術と構造」の観点から読むクラスとし、創作文執筆も授業に取り入れつつ、能動的な授業となるよう心掛けた。この授業実践は 2017 年度に論文化し、公表した。

④大阪府大高専専攻科 2 年「日本文学」においては、漱石「坊っちゃん」を上記③と同様に「技術と構造」という観点から半年かけて精読し、期末レポートは「坊っちゃん」の二次創作」を課題とすることで創作者の目線から作品を捉える視点を教授しようとした。

◆ 特記すべき教育方法の実践例

①抽象・具体、類似・差異をキーワードとし、構造的に理解し、なおかつ表現する練習
 国語の授業で重視するキーワード 4 つをあらかじめ受講者に示し、1 年の授業を通じて継続的な方法的根拠とすることで、文章の内容への理解だけではなく、構造を重視して文章を読解し、書くことへ応用する能力を養おうとした。

②モジュール学習の導入、「今日の文章」の試み
 国語では、小学校の英語教育などにおいて導入が推進されている、モジュール学習（帯学習）の考えを授業に取り入れ、実践した。改めて確認しておけば、モジュール学習とは、授業時間を細かく区切り（たとえば 45 分授業を 15 分×3 のモジュールとして捉えるなど）、授業時間全体でひとつのことをじっくり教えるのではなく、短い区切りによって展開される学習を一定期間継続することで効果を上げようとする教授法である。具体的には、毎回、ウォーミングアップのように、近代古典から筆者が選んだ文章を学生と読みあっている。その際には、受講者に二人組になってもらい、一文ごとに交互に読みあう手法（いわゆる「まるよみ」）で、必ず音読もさせている。授業で扱う文章は、すべて筆者が独自に選び、教材化した。

例）杉田玄白『蘭学事始』、福沢諭吉『福翁自伝』、ヘミングウェイ「ふたつの心臓の大きな川」、ブルースト『失われたときを求めて』、漱石『硝子戸の中』、鷗外「サフラン」、坂口安吾「ラムネ氏のこと」など

③具体性を重視する言語表現指導
 表現指導に際しては、繰り返し、具体性を持たせることが重要だ、と強調した。

④「クラス全員・具体例」の実践
 収斂より範列（パラディグム）的拡散を目指し、評論文に書かれた結論と具体例を「別の具体例」によって書き換え、クラス全員で言い合うという実践を行った。

校長顕彰などの受賞
 公立大学法人大阪・優秀教員理事長表彰（2018 年 6 月）

研究	<p>◆ 平成 28～30 年度における研究業績</p> <p>■ 学術論文執筆</p>
----	--

	<p>①吉田大輔「大阪府大高専・3年次・国語における4つのキーワード「抽象」「具体」「類似」「差異」の実践」『大阪府立大学工業高等専門学校研究紀要』52号、pp.35-46、2018年12月</p> <p>②吉田大輔「坂口安吾「ラムネ氏のこと」における名詞——幸田露伴「文明の庫」「頼朝」森鷗外「サフラン」との対比から——」『京都造形芸術大学研究紀要=Genesis』22号、pp.96-106、2018年11月</p> <p>③吉田大輔「幸田露伴の少年文学「鐵の物語」の英語典拠」『京都造形芸術大学研究紀要=Genesis』21号、pp.58-67、2017年11月</p> <p>他1件</p> <p>国際会議での発表 該当なし</p> <p>■ 学術講演会での発表</p> <p>①吉田大輔「幸田露伴「幻談」における固着、切断、創意工夫をめぐって」2017年日本近代文学会関西支部秋季大会、2017年11月、於・近畿大学</p> <p>②吉田大輔「坂口安吾「ラムネ氏のこと」の史的位置——幸田露伴「文明の庫」森鷗外「サフラン」との対比から——」2017年日本近代文学会春季大会、2017年5月、於・東京外国語大学</p> <p>③吉田大輔「幸田露伴「幻談」と西洋の釣り文学の移入をめぐって」、2016年度大阪大学比較文学会シンポジウム「比較文学研究の諸相と文学における都市表象」、2017年1月、於・大阪大学</p> <p>◆ 特許 該当なし</p> <p>◆ 平成27～29年度における外部資金獲得状況 該当なし</p> <p>◆ 学会などでの受賞 該当なし</p>
社会貢献	<p>◆ 平成27～29年度における公開講座・出前授業の取組状況 該当なし</p> <p>◆ 平成27～29年度における学協会等の委員 該当なし</p> <p>◆ 特記すべき社会貢献の内容 該当なし</p>